

グラスゴー方言

——その音韻・つづり字法・語彙——

杉 本 豊 久

目次

0. はじめに	(119)
1. グラスゴーの日常語：英語？スコッツ語？スコットランド語？	(120)
2. グラスゴー方言の音韻	(123)
2.1. 子音	(123)
2.2. 母音	(131)
3. 語彙の発音とつづり字法	(132)
4. グラスゴー方言のつづり字法	(135)
5. “ <i>Parliamo Glasgow</i> ” のつづり字法	(139)
6. グラスゴー方言の語彙の特徴	(143)

0. はじめに

スコットランドの言語事情は、多民族による言語接触の歴史を反映して複雑であるが、その中でもグラスゴーの方言は“*Glaswegian Patter*”と呼ばれ、特異な存在である。本稿では、スコッツ語（スコットランド語）の位置づけを配慮しつつ、特にその音韻の特徴とつづり字法との関係、さらにつづり字法と語彙表現の関係などに焦点を絞り、それらの具体的特徴を分析するとともに、1960年代にテレビ番組のコメディ・シリーズ“*Parliamo Glasgow*”で評判になり、この方言の表記方法に大きな影響を及ぼした独特のつづり字法を分析し、その特徴を探る。また、グラスゴー方言の語彙・表現について収集した資料を分野別に分類し、最後に加えてその傾向の一端を提示する。

1. グラスゴーの日常語：英語？スコッツ語？スコットランド語？

グラスゴーの一般市民が使っている日常語の変種を英語の一方言変種と見做すか、それともスコットランド独自の言語、「スコッツ語あるいはスコットランド語 (Scots)」と見做すかについての議論は、なかなか一筋縄ではいかない。「スコッツ語 (スコットランド語) (Scots)」を独自の「言語」と見做せば、そのルーツはゲルマン語系で、英語と同じ古英語である。現在、主にスコットランドのローランド地方と島嶼部、それに北アイルランドの一部で話されている。ハイランドおよび島嶼部での「スコットランド・ゲール語 (Scottish Gaelic)」、スコットランド全域で話されている「スコットランド英語 (Scottish English)」と並び、スコットランドにおける3つの主要言語を構成していることになる。

7世紀ごろ、イングランド北東部に住み、古英語のノーサンブリア方言を話していた「アングル人 (Angles)」が、7世紀ごろ現在のスコットランド南東部に侵入してきた。当時は、ハイランド地方や島嶼部では、当然のことながら先住民族の「ピクト人 (Picts)」や「スコット人 (Scots)」¹⁾の話すスコットランド・ゲール語が優勢であった。ところが、1066年のノルマン人による「イングランド征服 (Norman Conquest)」以後、ローランド地方には様々な言語接触があった。上層階級のアングロ・ノルマン人たちはフランス語を話し、その家臣たちは「古ノルド語 (Old Norse)」の影響を受けたイングランド北部の英語方言を話していた。当時 (9世紀以来) は、スカンジナビア半島を中心として活躍していたバイキングの一派、デーン人の支配下にあったからである。また、当時の自治都市には、北欧、北海沿岸の低地地方、フランスなどから商人や職人たちが大量に集まっており、彼らの話す言語との複雑な言語接触が繰り返されていたはずである。具体的には、イングランドの北東部を中心とした各地域の方言変種、古ノルド語、オランダ語、フランス語、それにスコットランド・ゲール語などが言語接触を起こし、ピジン化・クレオール化が繰り返され、これが古スコッツ語の原型であったと考えられる。これ以降、スコッツ語は自治都市を中心として「共通語 (lingua franca)」としての役割を果たすと同時に、ローランド地方における立法・行政言語としても機能するようになり、多くの文学作品も生まれた。

ところが、16世紀初めにスコットランドにもたらされた印刷技術は、当時イングランドで定着しつつあったジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer: 1340?-1400) の英語を規範とする正書法とあいまって、スコットランドにおける書き言葉としてのスコッツ語の定着を妨げることになる。さらに、ジョン・ノックス (John Knox: 1514?-72) を中心とした宗教改革が、英訳聖書を用いてプロテスタント普及に努めたことと、1603年の同君連合によりジェイムズ 6 世がイングランド王ジェイムズ 1 世として即位し、王一族および宮廷詩人たちはロンドンに移り、スコットランドにおける書き言葉としてのスコッツ語の担い手を失ってしまった。特にジェイムズ 1 世自ら先頭に立って進めた英語による『欽定訳聖書 (The Authorized Version of the Bible) (1611)』は、長期的に英語世界の拡大に計り知れぬ役割を果たすこととなった。1707年の合邦 (議会合同) 以降、ローランド地方を中心としたイングランド化が進み、スコットランド・ゲール語の衰退とともに、スコッツ語の使用領域も狭められていった。

18世紀になって、デイビッド・ヒューム (David Hume: 1711-76) やアダム・スミス (Adam Smith: 1723-90) などによる、ローランドでのスコットランド啓蒙も英語が使われたのに対し、アラン・ラムジー (Allan Ramsay: 1686-1758)、ロバート・ファークソン (Robert Fergusson: 1750-74)、ロバート・バーンズ (Robert Burns: 1759-96) などの詩人や、サー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott: 1771-1832)、サミュエル・クロケット (Samuel R. Crockett: 1860-1914)、ジェイムズ・バリ (James M. Barrie: 1860-1937) などの散文作家たちはスコッツ語を駆使したが、土着の言葉への共感や懐古主義的傾向が強く、身分の低いものが話す言葉としての印象は免れず、その社会的地位を回復するには至らなかった。このような状況を打破しようとして、1920年代にヒュー・マクダミッド (Hugh MacDiarmid: 1892-1978) が主導した「スコットランド文芸復興運動 (Scottish Renaissance)」はスコッツ語をスコットランドの政治的・文化的独自性の象徴として掲げたものであった。彼は古代スコッツ語を基に Lallans と呼ばれる「合成スコッツ語 (Synthetic Scots)」を考案し、スコッツ語による現代文学のジャンルを開拓した。

現在、ある調査²⁾によれば、スコットランドの人口の約 3 分の 1 の

人々（約150万人）がスコッツ語を話すとされているが、1991年および2001年の国勢調査にはスコッツ語の使用状況に関する質問項目が設けられていないため、その正確な話者の数は不明である。1985年に「スコットランド国家遺産法（National Heritage Scotland Act）」が、スコットランド文化の伝統を継承・発展する目的で制定され、スコッツ語の振興策が講じられてきたが、特に2001年に「地域言語あるいは少数言語のための欧州憲章（European Charter for Regional or Minority Languages）」をイギリス政府が批准したことはスコッツ語にとって福音であった。ウェールズ語およびスコットランド・ゲール語とともにスコッツ語もこの憲章で保護される言語の対象となったからである。スコットランド議会を初めとし、教育・文化活動の各分野で振興策が検討・実施されつつある。

このように「スコッツ語／スコットランド語」に焦点を合わせてその歴史を概観してみると、スコットランド・ゲール語やスコットランド英語などとは異なる独自の言語が別個に存在するかのような印象を与えるのだが、実はすでに述べたように古英語を起源としている点で英語と共通しているし、そのために語彙や文法が極めて類似しており、スコットランド英語とスコッツ語の境界線が引きにくいという事実がある。したがって、言語的特徴という観点からすれば、英語の一方言としての印象はぬぐい得ない。また、スコッツ語にも様々な地域差があり「標準スコッツ語」のようなものが設定しにくいという事実もある。そのための妥協案として、スコッツ語とスコットランド英語を両極に配置した「言語連続体（Linguistic Continuum）」を設け、スコットランドで話されている様々な英語系言語変種をこの連続体のどこかに位置づけるという図式が提案されてきたのである。従来のスコッツ語の振興策のほとんどが各時代を先導してきた知識人たちによる活動を通して行われてきたという事情と、一般市民の言語活動が言語の復興の活力になっていくべきだとの見解を配慮しつつ、スコッツ語の今後の発展を観察したい。と同時に、ローランドにおけるスコッツ語あるいはスコットランド語の一言語変種たるグラスゴー方言の語彙・発音・つづり字法に焦点を絞り、その具体的特徴と問題点を明らかにしたい。

2. グラスゴー方言の音韻

2.1. 子音

グラスゴー方言は、すでに指摘したように一方の極に「スコッツ語 (Scots)」を、他方の極に「標準スコットランド英語 (Standard Scottish English)」を持つ一連の言語連続体を想定すれば、その中のどこかに位置づけられると思われるので、その音素の目録一覧、音声学的分布および調音法については、英国における他の非標準英語 (方言変種) の場合と同じように、基本的に標準スコットランド英語のものを基盤として考えてよい。スコッツ語の母語話者の中で、「容認発音 (Received Pronunciation: RP)」の話者はほんの僅かしかおらず、それは英国全体の様々な方言母語話者の中で容認発音の話者が僅かしかいないのと同じである。そして、グラスゴーに限定された地元の人々の具体的な発音の特徴は、この地域の標準語のそれを基準にして考えるのが実用的であろう。なお、グラスゴーには市内のウエスト・エンド (West End) の一地域の名称にちなんで「ケルビンサイド (Kelvinside)」³⁾といわれるタイプの訛りがある。これは、この地域の中産階級の人々のスピーチ・スタイルであり、一般には「きざな話しぶり」と見做されているが、英国全体から見るとこの地方特有の話しぶりで見做され、マスメディアでグラスゴー出身の滑稽な人物を演出するのによく使われてきた。その音声的特徴は、主として超文節音素的なものに見られ、McClure (1980), Brown et al. (1980), Cruttenden (1981), Currie (1979) などの先行研究がある。

2.1.1. 音素/x/

ゲール語や古英語に由来する普通名詞や固有名詞の中に、音素/x/を含むものがある。ただし、グラスゴーでの日常語においてはその機能的役割分担の幾つかを失いつつあり、たとえば次にあげる実例の中で nicht (=night), fecht (=fight)などはあまり聞かれなくなっており、また St. Enoch's のような地名 (固有名詞) の中には音素/k/で代用されているものが多い。

2.1.1.1. 普通名詞：

aucht (=eight), bachle/bauchle(=a relatively mild insult aimed at anyone considered old or odd-haped or slovenly), bocht (=bought), broch (=a type of wide round stone tower), brocht (=brought), cailleach(=an old woman), cranachan(=a traditional Scottish dessert made from whipped cream, honey, toasted oatmeal, and soft fruit such as raspberries), echt, fecht(=to fight), fechter (=fighter), ficherie, forfochen, forochtin, fricht (=frighten), gralloch, hochmagandy, horny-golach, keech(=excrement), laich/laigh(=low), laroach(=ruins), licht (=light), loch (=lake), lochan(=a small lake), machair, micht (=might), mochie/mochy(=damp, misty and humid weather), mollach(=wander about aimlessly), nicht(=night), och(=an expression of surprise, contempt, annoyance, disagreement, etc.), ochone (=an expression of sorrow or regret), ocht (=anything), pauchle (=pochle), pech (=pant for breath), pibroch(=a piece of music for bagpipes), pochle, quaich(=a small shallow drinking cup), ramgunshoch (=unpleasantly rough, coarse and bad tempered in manner), richt(=right), roch(=rough), shauchle(=to walk slowly), shenachie(=someone who has an extensive knowledge of Gaelic history and folktales), sheuch/sheugh(=a gutter or ditch for drainage), sicht(=sight), skeich(=excited, lively but upset mood), sleuch(=to drink noisily), souch/sough(=noisily), sprauchle/sprachle(=clamber), stracht/strecht(=straight), teuch(=tough and hard to chew), teuchat(=lapwing, pewit), teuchter(=a Highlander, esp. Gaelic speaker), thocht(=though), trauchle/trachle(=tiring and monotonous work or task), wheech(=to move quickly), wecht(=weight), hooch(=the exuberant cry uttered by people engaging in Highland dancing or by those looking on)

2.1.1.2. 固有名詞：

Auchenback, Bach, Brocher (=someone from the towns of Fraserburgh or Burghead in Northeast Scotland), Machars(=the area of Southwest Scotland occupying the fertile peninsula between Wigtown Bay and Luce Bay), McCulloch, MacWhachle, Sassenach(=an English person), Sgionaich/Sgitheanaich, Sauchiehall Street

2.1.2. 音素/hw/と/w/

スコットランド英語には音素/w/と/hw/の対立があり、前者は主としてつづり字 w、後者は主としてつづり字 wh で表記される。特に後者の音素/hw/が使われる語彙群は、英語では地域によって音素/w/で発音する地域と音素/hw/で発音する地域とがあり、一般に標準イギリス英語では音素/w/が使われる。したがって、この点でスコットランド英語は標準イギリス英語と異なる。グラスゴウの日常語も基本的にスコットランド英語と同様である。

【音素/hw/】

wha/whae(=who), what way(=how), whaup(=curlw), whaur(=where), wheech(=to move quickly), when(=large number or quantity), wheesh/wheesh(='Be quiet!', 'Shut up'), whigmaleerie(=a decoration, trinket or ornament), whisky, whit(=what), white pudding(=a type of sausage which is filled with oatmeal flavoured with suet, onions, salt, and pepper), whitsunday(=one of the four Scottish term-days, on May 15th), whitteerick(=weasel, stoat)

【音素/w/】

wa(=wall), wabbit(=tired), wallie/wally(=made of porcelain or glazed china), wallies(=false teeth), wan(=one), wance(=once), wanchancy(=unlucky), warmer(=annoying or disgusting person), warrant sale(=a forced sale of a debtor's property in order to pay off debts), washback(=a large vat used in whisky-making in which yeast is added to the water and grain mixture and the liquid is then left to ferment and produce the wash), waste(=to spoil or damage something by ill-use), watter(=water), wean(=child), wee(=litte, small), weel(=well), weelkent(=well known or familiar), weemen/weemen falk(=women), wellied(=drunk), wi(=with), widna/widnae(=wouldn't), wife(=middle-aged woman), Wigtownshire(=a former county in the Southwestern corner of Scotland), wild hyacinth(=bluebell), winch(=to be romantically involved with someone), windae/windy(=window), winna

(=will not/won't), wise, wish(=want), workie(=workman), wrang(=wrong), wulk(=whelk), wurnae(=weren't), wynd(=a narrow winding street or lane)

2.1.3. Post-vocalic/r/

「母音直後の (Post-vocalic) /r/がみられ、特に母音間では「弾音 (Tap)」[ɾ]⁴⁾として具現化されたり、「接近音 (Approximant)」[ɹ]⁵⁾として発音されたりする。また、強調されて「震え音 (Trill)」[r]⁶⁾となることもあるが、グラスゴーのような都会での話し言葉では、強調の際以外ではあまり現れない。グラスゴーでは、この「母音直後の (Post-vocalic) /r/が威信形と見做されており、一般により保守的な傾向を示す女性たちの発音に定着しているようだが、これに対する反動的傾向として、この種の/r/を脱落させる現象が、主として労働者階級の男性たちの間に見られる。⁷⁾この「母音直後の (Post-vocalic) /r/の欠如あるいは「削除 (Deletion)」は、一種の「母音化 (Vocalisation)」あるいは「咽頭音の母音的文節音 (Pharyngeal Vocalic Segment)」と分析することもできる。

- 1) 語尾 (Word-final) : after, bar, brammer(=a term applied to anything considered a first-class example of its kind), motor, for, yer, air, fur, sure, near, moocher, wur(=a broad Glaswegian term for *our*), merr(=a local form of *come here*, shortened in speech from the already compressed *c'mere*)
- 2) 子音直前 (Before Consonant) : start, airport, Ally Park, first, urny (=the negative form of *ur*, *aren't*), mustard, bearpit, birlin(=a Scots word meaning *spinning*, often used locally to mean *drunk*), dear's party, kerds, arm, arse, parsley, beardie(=a bearded man : disrespectfully)
- 3) 母音間 (Between Vowels) : street Arab, furrit, horror, in one's baries (= to have nothing on your feet), barra(=a local version of *barrow* that appears in various phrases), the Barras(=the popular

name for the partly open-air, partly covered market area, east of Glasgow Cross), the berries, the *morra* (=a local version of the *morrow*, that is, *tomorrow*), airies(=an abbreviated form of *aeroplane*)

2.1.4. /l/

標準英語においては、音素 /l/ は「明るい (clear) l [l̥]」と「暗い (dark) l [ɫ]」の2つの異音を持つ。「明るいl」は、舌先が歯茎に触れると同時に前舌面が硬口蓋の方向に盛り上がる。つまり、前方母音を発音するときに似ていて、前舌面と硬口蓋の間隔は、次に続く母音に影響される。一方、「暗いl」は、口舌面が軟口蓋の方向に盛り上がり、後方母音 (例えば/u/) を発するときと似ていて、舌の中央部が下がり窪んだ状態となる。一般に、「明るいl」は、例えば like, left, million などのように、語頭、母音直前、/j/ 直前などに現れ、「暗いl」は、例えば milk, old, bell などのように、子音の前や語末の位置に現れる。

ところが、グラスゴーの方言では、これらすべての言語環境で、「軟口蓋化 (velarized)」あるいは「母音化 (vocalized)」が起こりうる。ただし、標準英語において「明るいl」の現れうる言語環境においては、この現象が起こりにくいという傾向がある。社会階級に応じて、つまり、労働者階級の人々よりも中産階級の話者の間で特にこの傾向が強いといえる。このような軟口蓋化 (母音化) がつづり字にそのまま反映されている例が散見される。

- 1) 語尾 (Word-final) : a', aa, aw (=all), ara/a-raw (=at all), ba/baw (=ball)
- 2) 子音直前 (Before Consonant) : ayeways (=always), bawface(=ballface), baw-hair(=ball-hair), bawheid(=ball head), baws(<balls=testicles), haud(=hold)

Cf. 1) 語頭 : laldy, Lally's Palais, lamp, lavvy, left-footer, lemon top, the Light Blues, Lipton's orphan, the Lisbon Lions, loaded, the Orange Lodge, loop-de-loop, Lorne sausage, loupin, low-flyer,

luckies, lucky middens, lumber

- 2) 母音直前 : balloon, beeline, belly, the Bella, belong to, Billy, birlin, the boolin, bubbly, bug-ladders, the Bully Wee, Cally/Carly, cally dosh, claim, clamp, clapped-in, clappy-doo, Clarence, clatty/clarty, the Clennyh, click, Clockwork Orange, close, clog up, cludgie, clug, Clyde, colour, Curry Alley, the Dallie, dillion, doolander, doolie, doowally, Dublin
- 3) 子音直前 : baldy(=someone who has had his hair cut very short may be described as having had a *baldy*), the Balgray(=a familiar name for Balgrayhill, a district on the north side, near Springburn), belter(=any of a wide range of things seen as exceptionally good), Celts, devilment
- 4) 語尾 : bell, bubble, bumfle(=a piece of material or a garment is wrinkled or creased), caunle(=candle), Central, coal-carry(=a local name for a piggyback), dale(=the high diving board or platform at a swimming pool), the Dale, diesel, doll, double duster, double wide, doughball(=a fool)

2.1.5. /ð/ and /θ/

これらの有声・無声歯間摩擦音 /ð/, /θ/ については、世界各地に見られる非標準英語の様々な変種に共通して見られる幾つの変異形をグラスゴー方言も持っているのだが、有声音と無声音とではその変異のパターンがやや異なるようだ。例えば米国黒人英語をはじめとして、世界中の英語系のピジンやクレオールに共通して見られるように、有声音 /ð/ については語頭では /d/ で代用され、無声音 /θ/ については語頭では /t/ で代用される傾向が強い。また前後の言語環境の影響を受け、同化現象を起こすことが多い。ところがグラスゴーでの日常語では必ずしもそうではなさそうだ。

2.1.5.1. 有声歯間摩擦音 /ð/ は、語頭で脱落したり、母音間や語頭

で /r/ に同化したり、語頭で /d/ で代用されたりする。

brother [bɪʌfʌ], mother [mʌfʌ], that [fäʔ], faither [fe-fə], there

2.1.5.2. 無声歯間摩擦音/θ/は、語頭では/h/で代用されたり、直後の有声音に対応する無声音で代用されるという形で同化現象を起こすことがある。

think [hɪŋk], something [sʌ(m)hm, sʌ(m)ŋm], three [ɹi:]

また、これらの音声的特徴の幾つかは、次のようにつづり字に反映されている。

hanks (=thanks), hing (=thing), somhin (=something), everyhin (=everything), nuhin /nochin (=nothing), anyhin (=anything), hink(=think)

2.1.6. Glottal Stop /ʔ/

「声門閉鎖音 (glottal stop)」については、特に語尾あるいは語中の母音直前において、かなりの高頻度で音素/t/の代用として現れる。また、/t/ほどに頻度は高くはないものの、/k/や/p/などの代用としても現れる。Macaulay (1977: 45-8) の調査でも、すべての社会階層において、高頻度で使われており、グラスゴー特有の現象であるかの様な指摘があるが、声門閉鎖音の多用は、グラスゴー方言に限ったことではなく、ロンドン方言のような大都市での日常語にも共通した特徴でもある。⁸⁾

Something that didn't happen very often [sʌmθɛŋ ðɛʔ dɪdnʔ hæ:pʰɛn vɛ:rɛ ɔ:fɛn], at my school [ɛʔ mɛ-e skʊ-ɪ], Know how families get that wey [nʌ həð fe:mɛz gɛʔ fäʔ wɛɪ], __, right? [fɛiʔ], Och, who're you fuckin talking to, [ɔx: y jy fʌkʰɛn tʰɔ:ʔkɛn tʰɛ], gets [gɛz], oot [ʰʔ], getting [gɛʔɛn] fightin [fɛiʔɛn], fuckin [fʌʔkɪn], it [ɛʔ], what [ʌʌʔ], that [fäʔ] So they went away to the dance, but (so ðɛ wɛnʔ ʌwe ʒ ðɛ dā-ns), nothin lik that [nʌhŋ ɪɛʔ ðä:ʔ], Ah stuck a ticket on her back [ä: stʌkʰ ʌ tʰɛkʰɛʔ ŋ ɛɪ bā:ʔk], Aye, that night.[aɪ ða:ʔ nɛiʔ] what [ʌɪʔ], water [waɪ], thruppence [ɹɪʌʔɪns], blacken [blaʔŋ]

2.1.7. 語尾子音連結<V+nt>、<V+rt>の単純化

一般に、語尾子音連結 (Final Consonant Clusters) の最終語尾子音

が脱落する現象は、米国黒人英語や世界各地の英語系ピジン・クレオールに数多く見られる。例えば、first, second, left, port, sentなどの語尾子音連結 -st, -nd, -ft, -rt, -nt の最終子音の / t / や / d / が脱落して、つづり字法としては firs', secon', lef, por', sen' のように表記される。ところが、Speitel (1975: 45) の指摘によれば、グラスゴーの日常語では、例えば語尾子音連結<V+nt>、<V+rt>の結合形において、まず語尾の/t/が声門閉鎖音 / ʔ / で代用され、語尾子音連結が<V+nʔ>、<V+rʔ>に単純化され、さらにこの声門閉鎖音 / ʔ / の直前の / n / や / r / さえも単純化され、脱落してしまうのである。例えば、wanting が [wa:ʔn] となり、さらに [wā:ʔn] へと単純化してしまう。また、don't know は [dāʔno] となり、最終的に [dʌno] にまで単純化する。このような現象は、特に日常の早い口調での会話で生じやすい一種の言語変化といえようが、後述するグラスゴー方言のつづり字法の自由奔放さを斟酌すれば、グラスゴーの人々の日常語に対する柔軟性とエネルギーを象徴する一側面といえるかもしれない。

2.1.8. 語尾子音連結<rl><rm><lm><rn>の回避

前述の語尾子音連結の単純化は、ある意味で語尾子音連結の回避といえるかもしれない。というのも、語尾子音連結<V+nt>、<V+rt>の結合形において、語尾の / t / が声門閉鎖音 / ʔ / で代用され、さらにこの声門閉鎖音 / ʔ / の直前の / n / や / r / が脱落して、二段階の単純化が見られたわけだが、その結果として語尾子音連結の結合形が回避されたともいえるからである。このような解釈の妥当性を支持するような現象が、一連の語尾子音連結<rl><rm><lm><rn>においてもみられるのである。ここでは、これらの二重子音の間に母音を挿入することによって、子音連結を回避している。いわゆる「語中音挿入 (epenthesis)」という現象である。例えば、girl, arm, film, torn の発音がそれぞれ、[gɪɹʌɹ], [ɛɹʌm], [fɪɹʌm], [toɹʌn] となり、語尾子音連結が解消される。

2.1.9. 母音間の音素 / t / (/ t / Between vowels)

音素 / t / が母音間で、前後の母音に影響されて (あるいは同化されて) 有声音化し、「弾音 (Tap)」(前述、脚注2) を参照) となる。例

例えば、アメリカ英語で、water や city がこれと同じ現象により、water [wa:tə] ⇒ [wafə], city [sɪti] ⇒ [sɪfi] となり、標準イギリス英語の発音 [wɔ:tə] や [sɪti] と区別されるのと同様である。

little, getting, fightin, nothing, sittin, written, pattern, attitude, butter
get away, a bit of, it is, get it

2.2. 母音

標準スコットランド英語には、強勢のある音節における基本的な短母音が9つあるが、スコットランド西部中央地方の方言に属するグラスゴーにおける母音体系もほぼこれに順ずるといえる。具体的には、/ i , e , ε , a , ɪ , u , ɔ , o , ʌ / である。これに、ever, heaven, never, seven, twenty など少数の単語に現れる中舌化された母音 / ɛ / が加わる。社会階層によりかなりの変異性が見られるが、ほぼ共通している具体的特徴を次にまとめることができる。

- 1) スコットランド英語の / ɪ / は、一般に RP よりも「低められている (lowered)」が、グラスゴーでの / ɪ / はそれに加えて、「後方化し (retracted)」、ほとんど / ʌ / の位置に近い。
- 2) スコットランド英語に見られる音素 / u / は、一般に RP よりも「中央寄り」であるが、グラスゴーにおいては「前方かつ下位」となり、ほとんど / ʊ / に近い。
- 3) 強勢のあるすべての母音について「母音延長」が見られ、「グラスゴーっ子は母音を長く伸ばすのが特徴」との俗説を裏付けている。

二重母音については、/ ae , ai , au , oe / の4つを基本としている点でスコットランド英語と共通しているが、次の3点が際立った特徴といえる。

- 1) / ai / の出発点が通常もっと中央寄りである。

2) / ae / と / ai / は RP の / ai / に対応しており、長音で発音する環境では / ae /、短音で発音する環境では / ai / となる。

3) 特に、Kelvinside の話者たちはこれら 2 つを融合させている。

3. 語彙の発音とつづり字法

通時的に単語を分類すると、次に示すように、つづり字法との間にある種の規則性が見られる。単一の音素に対し複数のつづり字が対応しているために、グラスゴーの発音の難解さを助長しているが、これは標準英語の場合も同じである。ただ、つづり字と単一音素の対応の仕方が標準英語と大きく異なるために、標準英語の話者にとっては分かりにくいのは否めない。

3.1. 古英語の / a : / が独自に進化して / e / となった語群は、ai, ae, a とつづられる 3 つのグループに分かれる。

- 1) ai: baith (=both), claithes (=clothes), ghaist (=ghost), mair (=more), pairty (=party), yaird (=yard), aipple (=apple), faimly (=family), faither (=father), jaiket (=jaket)
- 2) ae: nae (=no), naebuddy (=nobody), sae (=so), tae (=toe)
- 3) a: alane (=alone), nane (=none), stane (=stone), alang (=along)

3.2. 古英語の / o : / が独自に進化して / ø : / となった語群は、ui または u+C+e でつづられる。

- 1) ui: bluidy (=bloody), guid (=good), puir (=poor), muin (=moon)
- 2) u+C+e: efternune (=afternoon), gude (=good), schule (=school)
(C=Consonant)

さらに後になって、「スコットランド英語母音の長さの規則 (the Scottish Vowel Length Rule)」により、「長い (long)」言語環境においては非円唇の / e / となり、「短い (short)」言語環境においては非円唇の / ɪ / となった。それぞれ、ae, ai 及び i でつづられる。

⇒ 1) / e / ae: dae (=do), tae (=to, too)

ai flair (=floor), shair (=sure)

- 2) /ɪ/ i: blidy (=bloody), dis (=does), tim (=tuim, toom), yist (=used), nixt (=next), twinty (=twenty), rid (=red), jist (=just), wid (=wood)

3.3. 古英語の /u:/ がそのまま残留し、長さを失い /u/ となった語群は、oo や ou でつづられる。

- 1) oo: about (=about), aroon (=around), broon (=brown), doon (=down), doot (=doubt), hoor (=hour), hoose (=house), mooth(=mouth), noo (=now), oor (=our), roon (=round), troosers (=trousers)
- 2) ou: nou (=now)

3.4. 古スコットランド語の /ɛ:/ が独自に進化して /i/ となった語群は、ei でつづられる。

ei: breid (=bread), deid (=dead), heid (=head), bawheid (=stupid)

3.5. 古スコットランド語の /o/ あるいは /ɔ/ が、唇音の言語環境において進化して /a/ となった語群は a や oa でつづられる。

- 1) a: [唇音環境で] aff (=off), drap (=drop), saft (=soft)
- 2) oa: [その他の環境で] boady (=body), boather (=bother), boax (=box), doactur (=doctor), Goad (=God), goat (=got), hoat (=hot), joab (=job), knoatit (=knotted), loast (lost), moarning (=mornig), oaffice (=office), oan (=on), cumoan (=come on), Scoatch (=Scotch), shoart (=short), stoap (=stop), shoap (=shop), boay (=boy)

3.6. 古スコットランド語の /a/ が、/w/ の直後でそのまま残留した語群は、waa, uaa, wah などをつづられる。

- 1) waa: waant (=want), waash (=wash), waater, (=water),
- 2) uaa: squaad (=squad)
- 3) wah: wahnt (=want)

3.7. 古英語の / aŋ / が / aŋ / となった語群は、ang でつづられる。
ang: alang (=along), belong (=belong), lang (=long), wrang (=wrong)

3.8. 古スコットランド語の / ai / が進化して / ai / となった語群は、ey でつづられる。

ey: gey (=gay), pey (=pay), stey (=stay), wey (=way), anywey (=anyway)

3.9. 古スコットランド語の / a, o, u / の直後で、/ l / が母音化し、特に / al / は進化して / ə / となる語群は、aw, au, aa, a' などでつづられる。

1) aw: aw (=all), baw (=ball), faw (=fall), waw (=wall), Haw (=Hall)

2) au: faut (=fault), haud (=hold), hauf (=half), saut (=salt)

3) aa: aa (=all), aaready (=already),

4) a': a' (=all), sma' (=small), wa (=wall) Ha' (=Hall)

ただし、直後に / d / がある場合には、/ l / の脱落は妨げられる傾向がある。

aul(d) (=old), cauld (=cold) [cf. haud (=hold)]

さらに、/ ol / が進化して / u / となり、ow でつづられる。

ow: gowd (=gold)

また、/ ul / が進化して / u / となり、u, ou, oo などでつづられる。

u, ou, oo: fu, fou', foo (=full), pu' (=pull), doo (=dove)

3.10. 語尾子音連結 / -ld, -nd / が単純化されて、/ -l, -n / となることがある。

1) aul (=old), chiel (=child) ;

2) foon (=found), haun (=hand), hielan (=highland)

mine (=mind), san (=sand), spen (=spend), staun (=stand),
unnerstaun (=understand)

3.11. 強勢のない音節で、語尾の / d / が無声音化する。
bastarɪ (=bastard), hundretɪ (=hundred), mairritɪ (=married)

3.12. 語中および語尾において、/ v / が母音化あるいは脱落する。
de'ɪl (=devil), gie, gi', gey, gee (=give), hae, ha'e, (=have), lea', lee (=leave), o', o, a (=of), owre (=over), twal' (=twelve)

4. グラスゴー方言のつづり字法

スコット語のつづり字法の概略をまとめれば、伝統的に標準スコットランド英語との間に著しい差異が認められないような語彙項目については標準スコットランド英語のつづり字法をそのまま踏襲し、スコット語独自の語彙や形態素形については独自のつづり字を採用してきたといえる。ただし、互いに古英語という共有する体系に端を発しているために、同じつづり字を採用しているものの、その後の進化により微妙な音声の違いを表現できないケースも例外的に存在することは容易に想定できる。つまり、同一のつづりであってもお互いに異なる発音を表すこともありうることで、それは英語の他の多くの言語変種にも見られることである。

伝統的なつづり字法の習慣については、18世紀および19世紀の文献に豊富だが、公文書、新聞、雑誌など formal な分野でのつづり字法の実態と、ドラマを初めとする娯楽中心の informal な分野でのつづり字法の現実とはかなりのズレが見られる。そこで、いわゆる「スコットランド文芸復興 (Scottish Renaissance)」の担い手であった有能な作家たちの多くが所属していた「マッカーズ・クラブ (the Makars Club)」が、スコット語の正字法を確立しようと1947年に「スコット語執筆要領 (*The Scots Style Sheet*)」なるものを作成し、スコット語のつづり字法に関する一連の推薦モデルのようなものを提示したのである。前述のスコット語の人工的な復活形である 'Lallans' を提唱した作家たちによってこれらが採用されたのは言うまでもない。その後、「スコット語協会 (the Scots Language Society)」も1985年に「スコット語執筆者への勧告 ("Recommendation for Writers in Scots")」を公にしているが、多くの支持を得るには至ってはいないようだ。一部の知識人たちの期待や自己

満足の域を脱皮し切れていない現実と、言語は大衆が作り上げていくものとの認識の欠如がその要因として存在するのではなからうか。

グラスゴーでのつづり字といえば、1960年代初めに登場した、Alex Mitchell によって書かれ、コメディアン Stanley Baxter⁹⁾によって演じられたテレビのスキット・シリーズ “Parliamo Glasgow” に端を発したとっていいだろう。この番組の中で繰返されるこっけいな冗談は、独特のつづり字によって、グラスゴー方言を何か別の外国語であるかのように見せた。ところが、この外国語のようなつづり字の単語やフレーズが、いったん声を出して発音されると、不思議なことにグラスゴー方言のように聞こえてきたという。このつづり字法の最も典型的な特徴は、文やフレーズを構成する単語群をすべて繋げて表記することであり、それによって文や句があたかも謎解きをしているかのように不明確になった。しかし、これらのつづり字の再構成をよく分析してみると、それなりに規則性があり（つまり、前述の「3. 語彙の発音とつづり字法」に示した諸ルールにはほぼ従っており）、形態上の必然性が随所に認められ、それが当時の文筆家たちに採用され、改善されていった。その中には、Ian Hamilton Finlay (1925–2006) の *The Dancers Inherit the Party* (1960) ; *Glasgow Beasts, An’a Burd* (1961), を初期の先例として、Alan Spence. *Glasgow Zen* (1981) ; *Stone Garden* (1995) ; *Seasons of the Heart* (2000) ; *Clear Light* (2005), Stephen Mulrine (1937–). *Scotch and Wry* (1978) (Rikki Fulton 主演のTVコメディ)、Tom Leonard (1944–) *Six Glasgow Poems* (1968–79), Alex Hamilton (1930–). *The Attic Express* (1982), James Kelman (1946–) *An Old Pub Near the Angel* (1973) などがある。

具体的なつづり字法については、これら文筆家たちの間でも相当の変異が見られるのだが、グラスゴーでのつづり字法の主な特徴をまとめると次のようになる。

4.1. 音素 / k / を表すつづり字 k を多用する。

choklit (=chocolate), yuzkin (=you can), yezkin (=you can), praktikkly (=practically), Suckie (=Sauchiehall Street), skoosh (=squash: ‘any fizzy soft drink’), kerry-oot (= < carry out: ‘take away’), dooket (=dovecote), kerds (=cards)

4.2. 音素 / z / を表すつづり字 z を多用する。

walliz (=wallies: 'false teeth'), cawz (=caws: 'sweeps'), palz (=pals: 'friends'), ez (=he's), shizz (=she's), bristulz (=bristols: 'titties'), tottiz (=totties: potatoes'), dizny (=doesn't), yeez (=you: plural of *you*)

4.3. 標準英語で o とつづる箇所に u が使われる。

unuff (=enough), nuhin (=nothing), murra (=mother), furra (=for)
luvli (=lovely), dug (=dog), fur (=for)

4.4. 音素 / I / は、グラスゴーでは低位かつ後方で発音されるため、u とつづられる。

buld (=build), durty (=dirty), luvin (=living), thurd (=third), wull (=will), hut (=hit), huv (=have), hud (=had), huvtae (=have to)

4.5. ある種の母音の直後、および t の直前で頻繁につづり字 h が挿入される。

thaht (=that), the Bhoys, Ah (=I), depenhhhdint (=dependent)

4.6. 語尾の音節主音としての子音を表すつづり字が単一で使われることがある。

aipl (=apple), bettr (=better), fukn (=fucking), litl (=little),

4.7. 語尾屈折の -ed は無声子音の直後で [t] と発音されるときには、t とつづられる。

hurtit (=hurted), beltit (=belted), wastit (=wasted), fittit (=fitted), startit (=started), teltit (=told), knittit (=knitted), bee-heidit (=bee-headed), heart-roastit (=heart-roasted), kilt (=killed), corrie-fistit (=corrie-fisted: 'left-handed'),

4.8. 強勢のない機能語が先行または後続する語彙項目に対し、音声学的に「前接的・後接的」であるとき、標準英語のようにアポストロフィーを使うのではなく、子音を重複させて前後に連結しているかのよ

うに表記する。

wirrawalliz(=with the wallies), wirrapalz(=with the pals), wirraheid (=with the heid), wirraboadi (=with the body), shizzasmashur(=she's a smasher), furrawean (=for the baby), tennafags(=a ten of fags), pirrit oanaslate (= put it on account), orrabest (=all the best), orratime (=all the time), whissup (=what's up), furryi (=for you), cuppa tea (=cup of tea)

4.9. 強勢のない機能語について複数の異形を持つ。

ya, ye (=you), -nae, -ny (=not : willny, urny, couldny, wouldny, cannae), nae-, noa- (=no- : naebdy, noabdy)

4.10. 語頭、語中、語尾などにおいて単語の一部（子音・音節）が脱落する。

Um (=him), dundy money (=redundancy money); caunle (=candle), granma (=grandmother), ganda (=grandfather), tummle (=tumble), haunbaw (=handball), hauf (=half), haud(=hold); fun (=found), gaun (=going, go on), grun (=ground), wae (=wall), gettin (=getting), wi (=with), bree(=brother)

4.11. 語頭、語中、語尾において単語の一部に子音や音節が挿入される。

Shuggy/Shug (=Hugh), shuge (=huge), Zliz (=Liz:Elizabeth), tumshie (=turnip); twicet (=twice), wanst (=once)

4.12. 単語や句の各種短縮化がみられる。

4.12.1. <-y 型>および<-ies 型>

- 1) <-y 型> amny (=am not), baldy, bevvy (=alcoholic drink or single drink or a session of drinking), bogey (=a child's cart), canny (=can't, cannot), clarty, dizny (=doesn't, does not), doowally(=an idiot), dunny (=the area below the common stair in a tenement building), emdy (=anybody), eppy (=epileptic fit), evrubdy (=everybody), folly/foley (=fellow), gauny (=going to), hairy, inky (=a

felt-tip pen), jakey (=a down-and-out, especially one who obviously drinks lots of *jake*, methylated spirits), janny (=a janitor in a school), jobby, laldy, lavvy (=a toilet, shortened from *lavatory*), malky, mammy, plooky, puggy, rammy, riddy, sanny (=sandshoe), scooby, shady, specky (=a spectacle-wearing person), stookey, swally (=swallow), toley, totty (=potato), urny (=aren't), voddy (=vodka), wacky baccy (=marijuana), willny (=will not, won't)

- 2) < -ies 型 > backie, baggie, bahookie, beardie, binnie, bonnie, bowfies, Buckie, cattie (=catalogue), chiefie, cludgie, doobie, Home Ekies (=Home Economics), geggie, guties, heidie, hudgie, hughie, icy/icie (=ice-cream van), ex/exie (=excellent), joggies, keelie, keepie-uppie, lassie, loosie, moothie, nippy sweetie, o vies, photie, schemie, stooshie, Suckie, tumshie, wallies

4.12.2. < -er 型 >

beamer, belter, blooter, bumper, chanter, dauner, dinger, falsers, fizzer, grave-nudger, greaser, jotters, keeker, low-flyer, lumber, ower, patter, peevers, shiters, skitter, wanner

5. “*Parliamo Glasgow*” のつづり字法

次に示すのは、Alex Mitchel の *The Sunday Post Parliamo Glasgow! : Visitors' Guide To The Everyday Language Of The European City Of Culture*. (1990 : Glasgow : D. C. Thomson & Co., LTD.) からの一節であり、この中に典型的なグラスゴー方言のつづり字表現が含まれている。カッコ内は筆者の検討・分析の結果と標準英語表記への翻訳である。

When There's A Royal Visit...

Two archetypal Glasgow ladies, Mattie and Sadie, were in the enthusiastic crowd that welcomed the Queen to Glasgow for the formal inauguration of the Year of Culture.

A native word of commendation came from Mattie when Her

Majesty appeared :

AWSHIZLUVLI! (⇒AW-SHI-Z-LUVLI! = Oh! She's lovely!)
[AW=Oh! ; SHIZ=she's ; LUVLI=lovely]

Sadie agreed :

SOSHYIS (⇒SO-SHY-IS =So, she is.)
[SO=So; SHY=she; IS=is]

Commenting on the Queen's purple coat, with hat to match, Mattie enthused with :

RAPURPLESUITSUR
(⇒RA-PURPLE-SUITS-UR=The purple suits her.)
[RA=the; PURPLE=purple; SUITS=suits; UR=her]

Sadie wanted to know what places Her Majesty and the Duke of Edinburgh would visit. Mattie told her :

THURGAUNOANATOURL
(⇒TH-UR-GAUN-OAN-A-TOUR=They're going on a tour.)
[TH-UR=They're; GAUN=going; OAN=on; A-TOUR=a tour]

Sadie asked her to elaborate :

TOUROWHIT? (⇒TOUR-O-WHIT?=Tour of what?)
[TOUR=tour; O=of; WHIT=what]

Mattie revealed :

RACULCHURBITSORATOON
(⇒RA-CULCHUR-BITS-O-RA-TOON=The culture bits of the town.)
[RA=the; CULTUR=culture; BITS=bits; O=of; RA=the; TOON=town]

Sadie was aghast when informed that the Queen would visit an exhibition of modern art and exclaimed :

AHSEENIT! (⇒AH-SEEN-IT!=I've seen it!)
[AH=I; SEEN=seen; IT=it]

"Did ye like it?" Mattie wanted to know. From Sadie, this brought an emphatic :

NAWAHDIDNI! (⇒NAW-AH-DID-NI!=No, I didn't !)
[NAW=No; AH=I; DID=did; NI=not]

Which met with the traditional query :

HOWRAT? (⇒HOW-RAT?=How's that?)

[HOW=How; RAT=that]

Sadie dismissed the “controversial” art show with a scathing :

LOTAKIDMALEARI

(⇒LOT-A-KID-MA-LEARI=A lot of kidology,my learning.)

[LOT=Lot; A=of; KID=kidology(art of kidding); MA=my; LEARI=learning]

The two ladies gravitated to George Square and the portals of the City Chambers.

They were impressed by the large number of people following the Royal pair into the Chambers. Sadie asked :

WHERRUREYGAUN?

(⇒WHER-RURE-Y-GAUN?=Where are you going?)

[WHER=Where; RURE=are; Y=you; GAUN=going]

Au fait with the Royal programme, Mattie informed her that the 600 or so guests were entertaining the Queen to an official banquet. Sadie was amazed :

AWTHEMYINS STUFFINTHURTURKIZ (⇒AW-THEM-YINS-STUFIN-THUR-TURKIZ=All their one’s stuffing their turkeys.)

[AW=All; THEM=their; YINS=one’s; STUFIN=stuffing; THUR=their; TURKIZ=turkeys]

Mattie had read in her paper that the banquet would include prawn cocktails and smoked salmon. She added :

ITLCOASTAMINT (⇒IT-L-COAST-A-MINT=It’ll cost a mint.)

[IT-L=It’ll; COAST=cost; A=a; MINT=mint]

“Hivvin help us!” shrilled Sadie, “Ah’ve jist :

PEYEDMAPOLLTAX

(⇒PEYED-MA-POLL-TAX=Paid my poll tax.)

[PEYED=Paid; MA=my; POLL=poll; TAX=tax]

“And Ah’m gaun’ hame tae :

MINCEANTOTTIZ”

(⇒MINCE-AN-TOTTIZ=Mince and tatties(potatoes).)

[MINCE=Mince; AN=and; TOTTIS=tatties: ‘potatoes’]

Mattie was somewhat surprised at her friend’s lack of culinary culture,

and suggested she might use the mince to more exotic effect by making :

SPAGETTIBOLLYNEESY or LASANGY

(⇒SPAGETTI - BOLLYNEESY - OR - LASANGY = Spaghetti, Bolognese or Lasagna.)

[SPAGETTI = Spaghetti; BOLLYNEESY = Bolognese; LAZANGY = Lasagna]

Sadie ignored this slight on her homely kitchencraft, preferring to speculate on the table plan inside the City Chambers :

ZLIZGONNYSITWIRAELPEE?

(⇒ZLIZ-GONNY-SIT-WI-RA-EL-PEE?=Liz(Queen Elizabeth) is going to sit with the L.P.(Lord Provost))

[ZLIZ=Liz(Queen Elizabeth); GONNY=is going to; SIT=sit; WI=with; RA=the; EL=L: 'Lord'; PEE=P: 'Provost']

Mattie, with her insider's knowledge of Royal protocol, was able to confirm that indeed, Her Majesty would dine with the Lord Provost. But she wondered :

WITKINSHI TOCKTAEHURABOOT? (⇒WIT-KIN-SHI-TOCK-TAE-HUR-ABOOT?=What can she talk to her about?)

[WIT=What; KIN=can; SHI=she; TOCK=TALK; TAE=to; HUR=her; ABOOT=about]

Sadie, habituee of many a hen night, had no doubts about the course the conversation would take between the two ladies :

THULNATTERABOOT THURMENANTHURWEANS

(⇒THU-L-NATTEER-RA-ABOOT-THUR-MEN-AN-THUR-WEANS=They'll natter about their men and their weans.)

[THU-L=They'll; NATTER=natter; RA=the; ABOOT=about; THUR=their; MEN=men; AN=and; THUR=their; WEANS=weans: 'children']

——Alex Mitchell (1990) *The Sunday Post Parliamo Glasgow!: Vistors' Guide To The Everyday Language Of The European City Of Culture*. Glasgow : D.C.Thomson & Co., LTD.

6. グラスゴー方言の語彙の特徴

グラスゴーはその歴史、風土、文化、人口構成などの違いから、よく

エディンバラと比較される。お互いの市民はこのことをよく承知していて、ことあるごとにお互いを意識し、敏感に反応する。私が滞在した、地下鉄（グラスゴーの人々は the Underground ではなく Subway と呼び、意識的にイングランドとの違いを強調している）Kelvinbridge 駅近くのパブ “The Doublet” で知り合った作家 Ian Black さんの著書、*Weegies vs Edinbuggers and Edinbuggers vs Weegies* (2003, Black & White Publishing Ltd.) にもその心意気がよく現れている。この書物は、片方の表紙のタイトルは *Weegies vs Edinbuggers* の部分が極端に大きく印刷されており、さらに副題として *Why Glasgow Smiles Better Than Edinburgh* とある。表紙をめくると、*Weegies start here.* という指示もある。一方、裏表紙は逆さまに印刷されており、同じタイトルではあるが、*Edinbuggers vs Weegies* の部分が極端に大きく印刷されている。しかも、副題は *Why Edinburgh is Slightly Superior to Glasgow* である。表紙をめくるとやはり *Edinbuggers start here.* と指示がある。典型的なグラスゴーっ子である Ian Black さんらしく、*Weegies* 側からの執筆量の方がはるかに多く、全体の約 3 分の 2 を占めていた。この副題からも想像できるように、エディンバラはスコットランドの首都であり、要塞として発展したが「北のアテネ」と称されるように上品で、インテリ層が多く、英国王室の宮殿ホリルドハウス宮殿もある。一方、グラスゴーは産業都市としての伝統があり、産業革命を支えてきた歴史を反映して、多くの労働者を抱える庶民的な町である。このような歴史的、経済的、人口構成的特色、具体的には大都市グラスゴーが抱えている各種犯罪・飲酒の習慣・貧困がグラスゴー方言の語彙に色濃く反映されている。その一側面を明らかにするために、Michael Munro. 2001. *The Complete Patter*. Edinburgh: Birlinn Limited.を中心に、Ian Black (2003), Allan Morrison (1997, 2001, 2005), David Ross (1999), Michael Munro (1985, 1988), Scott Simpson (2004), A. Carmichael (1990) などからの資料収集、かつ地元のパブでの資料提供者からの聞き取り調査をあわせて、グラスゴー方言の語彙・表現にどのような傾向が見られるのかを調査した。収集した語彙・表現を分野別に分類し、その数の多いものを順次配列した。グラスゴーの一般市民の抱えている犯罪・飲酒・貧困・人間関係などの問題や地元の娯楽や日常生活を反映し、「酒」、「ケンカ、怒り、罵り、恐れ」「サッカー」「不況・貧困・下層階級・不潔」「いやな奴

「すばらしい、幸運」「住居・家屋・家族・家庭」「犯罪・違反・ばくち・麻薬」などの語彙や表現が豊富であることが顕著な特色であった。また、当然のことながら、グラスゴアの地名、施設名、街路名、山河、入江、湖などの固有名詞を用いた語彙・句表現が多数みられ、これもグラスゴア方言の特徴の一端になっている。

6.1. グラスゴア方言の分野別語彙

6.1.1. 「酒」関係語彙

bazooka'd (=drunk), bender mender, bendy juice, bevvy, on the bevvy, heavy bevvy, bevvi'd, bevvy-merchant (=drunkard), biddy/red biddy, birlin (=drunk), bladdered (=drunk), blask, blitzed(=drunk), blootered, boky-fu, out ma box (=very drunk), out his brain(=drunk), brainless(=drunk), take a good bucket(=drink heavily), Buckie, Cally/Carly(=Carlsbery Special: strong lager), cheekywatter (=alcoholic drink), chokin(=in dire need of a drink), curer, dead/deid, diesel (=a mixed drink), El D/L.D.(=the fortified wine Eldorado), electric soup (=a cocktail of red biddy), Fire Brigutts (<brigade+butts=Fire Brigade), oot the gemme (=helplessly drunk), gantry (=the area behind the bar in a pub), garden party (=a drinking session), ginger, gingy(=ginger bottle), gun (=swallow it rapidly), guttered (=drunk), grousebeater, half/hauf (=a single measure of sprits), a half and a half-pint, happy day(=a mixed drink), haudin up the bar, hauf-scooped(=intoxicated), Ah've got a heid lik a sterrheid.(=I'm suffering with a hangover.), hooverin up, jake (=red biddy), jake up (=drunk), jake out, jakey (=down-and-out)

6.1.2. 「ばか者、あほう、まぬけ」関係語彙

bampot, bammy, bandit, bawheid, bamstick, Bam, bassa, Yer baws!, bee, bee-heidit, away wi the bees, bomb out, bum (=boaster), cakey, chookie (= a stupid person), daftie, diddy (=fool), diddy about(=behave stupidly), diddy washer(=a stupid person), doaty/doatery(=a state of forgetfulness), dobber(=idiot), doobie(=idiot), doolie(=idiot), doowally(<doolally: 'crazy'), doughball(=fool), dough-heid(=idiot), dreamy Daniel (=a

distracted or absent-minded person), eejit(=idiot), eekies, away with the fairies (=silly), fankle/fankled, a common five-eight (=average person), gommy (=idiot), gommy-lookin, bump your gums(=to speak nonsensically), haddie (<(Scots)haddock: 'foolish person'), yer heid's fulla mince/ broken bottles, yer heid's fulla dominoes and they're aw chappin, yer heid's up the lum/ yer own arse, away an bile yer heid, yer heid's fulla magic snowballs/ wee motors, get his head in his hands (to play with), the heid's went/away (=stupid), heid banger (=crazy person), heider/header (=mad)

6.1.3. 「ケンカ、怒り、罵り、恐れ」関係語彙

beelin, bold, bowly (=bandy-legged), breenge(=rush recklessly), bubble, bubbly, do your bunnit (=become angry), burst (=give someone a physical beating), crawl it, crap it (=be afraid), damp/dampt (=damn, damned), deck (=knock someone down with a blow), deefie, throw/sling someone a deefie, dig up(=provoke someone), dillion (=a single hard blow), ding(=a bash), to go one's dinger, dog's abuse(=severe criticism unpleasant treatment), give it dokey (=give it laldy), take a dokey (= become extremely angry), you're done (=you're damned!: threatening phrase), doof (=to punch someone), doolander (=a powerful blow), kick up Dublin (=create a fuss), spit out one's dummy (=to lose one's temper), dumpie(=a soft blow), feart (=frightened), take/throw a flakie (=lose your temper), go (=a fight), a squire go (=a one-to-one fight unarmed), gowpin/goupin (=painful), greet (=cry), growler (=a bad tempered person), gub (=give someone a punch in the mouth), take a hairy (fit) (= go crazy with anger), handers/hauners, hang/hing wan on someone, to hang one's jaw aff his face (=to slash him severely), hardman (=violent, tough man), to put/stick the heid on (=to head-butt someone), keep the heid (an Ah'll buy ye a bunnet) (=calm down), heard-roastid (=angered), hook (=to punch), hunt (=get rid of someone), hurtit (=injured), inty your heid (=physically assault)

6.1.4. 「Glasgow での固有名詞 (地名・施設など)」関係語彙

The Big Red Shed (=Scottish Exhibition & Conference Center(SFCC), Blythwood Square, Boots' Corner/ Dizzy Corner (= the corner of Argyle Street and Union Street), booze cruise, Buckie (=Buchanan Street), Central (=Glasgow Central Station), the Citz (=the Citizens' Theatre), the Clenny (=the City of Glasgow Council Cleansing Department), Clockwork Orange (=the Subway), Clyde (=Glasgow's river features), the Co (=a store of the Co-operative Wholesale Society), Curry Alley (=Gibson Street in the West End), the Dale (=Leverndale psychiatric hospital), the Dallie (=the Dalmarnock area in the East End), Dizzy Corner (=the corner of Union Street and Argyle Street=Boots' Corner), the Dough School ('baking academy'=the Queen's College=College of Domestic Science), the Drum (=the Drumchapel area), the Mulk, the Nitsie (=Nitshill), Egg Toll (=Eglington Toll), E.K. (=East Kilbride), Elky (=Alexander Clark : 1898-1956), get off your Elky Clark (=get up and go), Embra (=Edinburgh), chooky Embra (=the Duke of Edinburgh), the Fair (=the Glasgow Fair), the Gaspipie (=Garscube Road), Glesga/ Glesca/ Glasgie/ Glasgae (=Glasgow), Glasga grin (=slash on the face), Glesga nod/kiss (=head-butt), Gorbalonian (=native of Gorbals), Gourock, away to one side like Gourock, Govan, Govanite, the Govan kiss (=head-butt), the hallelujah (=the Salvation Army), Hawkheid (=Hawkhead Hospital), the Hielanman's Umbrella, Huggy Loch/ Huggy (=Hogganfield Loch in the East End)

6.1.5. 「サッカー」関係語彙

1) Rangers 関係 :

Bear (=Rangers supporter), blue, the Light Blues, the boys in (royal) blue), the follow-follow brigade (=Rangers supporters), the Gers (=Rangers F.C.), Hun (=Rangers supporter), Billy/Billy-boy, Ibrox/Ibrox Park (=the home ground of Rangers F.C.), blue nose (=Rangers F.C. supporters), Teddy Bears, Wilma, Sons of William

2) Celtic 関係 :

the Bhoys (=Celtic F.C., its players or supporters), biscuit tin, the

Celts(=Celtic F.C.), the 'Tic, the Jungle, Tim (<Tim Malloy : Roman Catholic), Parkhead (=the home ground of Celtic F.C.)

3) その他 :

Bladder (=football), blooter (=to kick powerfully but without much control), nae brains each (=no-scoring draw), the Bully Wee (=Clyde F.C.), bye kick (=goal kick), caw the legs/feet (=sweep one's legs out), put the clug on (=kick), cuff (=defeat), easy, Firhill (=the North-Side home ground of Partick Thistle), gemme (=football game), oot the gemme (=drunk), Hampden Park(=home ground of Queen's Park F.C.), the Hampden Roar, handbaw/haunbaw (=handball), to heidie (= to strike it with one's head), heidies/headers, wee heidies, heid-the-baw, homer, the Jags (=nickname for Partick Thistle F.C.), keepie-uppie (=to juggle the ball), sink (=bring someone down with a hard tackle), skate (=win easily), 'lock (=Pollock F.C.), the Spiders (=Queen's Park F.C.), body swerve, wee team (=reserve team), welly (=to kick powerfully)

6.1.6. 「不況・貧困・下層階級・不潔」関係語彙

boot (=sack), bothy, bowf (=stink or nasty smell), bowfies (=head lice), broo/buroo (=the Employment Service), broo money (=Unemployment Benefit), bump(=sack, dismissal), bunnit (=cloth cap), clenny-motor (=a bin lorry), coup (=rubbish dump), didgy (=dust bin), double dunt, dout/dowt (=a cigarette-end), dundy money (=redundancy money), give someone the gate (=to sack him), get the gate (=to be sacked), glabber (=mud, dirt), glass cheque, greaser, grog (=spit), handbaw/haunbaw(=carry/lift a heavy load by hand), Idleonian, one's jaike't's on a shoogly nail (=one's position is not secure), high heid yin, homer, boat/just off the boat (=Irish descent), Irish Steak (=cheese : a dig at Irish poverty)

6.1.7. 「いやな奴」反賛辞関係語彙

benson, black-affronted, bug-ladders(<sideburns), bummer, heid bummer, bun (=insult for an unattractive woman), chanty-wrastler(=

insult), give someone his character, crapper/crap-bag(=coward), all his eggs have two yolks (=He is always bragging about~), feartie (=a cowardly person), flyman (=a conman), gink (=smell unpleasantly), go-bi-the-waw (<go-by-the-wall=slow-moving or lackadaisical person), gommy (<gammy=artificial, false), gommy leg, gommy money, granny (=nonsense), your granny!, grot/grotbag (=unpleasant, dirty person), hackit (=ugly), wee hairy (=sluttish woman), heidnipper, hey-you (=insolent person), hielan(<Highland=illogical, naïve, clumsy), honkin (=smelly, poor quality), howlin (=very smelly), howpin (=smelly), hum-a-ding-dong (=very smelly), stirrer (=trouble maker)

6.1.8. 「すばらしい、幸運」賛辞関係語彙

beezer, belter, the berries, the berris, brammer, bran new, bum up (=praise), chiefie (=friendly term of address for a male), Ya dancer (=an exclamation of joy or enthusiastic approval), dearie mearie (=dear me), dillion (=anything exceptionally good), gallus(<gallows=excellent: cf. bad(=good)), gemmy (=plucky), like a good yin (=enthusiastically), holiday giro (=a double payment of benefit: unexpected bonus), hoachy (=very lucky, jammy), hullo! (=welcome!), humphy-tumphy

6.1.9. 「住居・家屋・家族・家庭」関係語彙

bought house, bree (=brother), breidsnapper (=child), brekwist (=breakfast), cludgie/cludge (=toilet), coffin end (=the narrow end of a tenement building), da (=Father), dancer (=a landing or floor in a tenement), granda (=grandfather), granma (=grand mother), three-dancer (=the third floor), four-dancer (=the fourth floor), tap-dancer (=the top floor), the deck (=the floor or the ground), dunny (=the area below the common stair in a tenement building), flit (=to move house), globe (=light bulb), good room (=visitors room), hingie, have a hingie, hooley (=noisy house party), hoor's knickers, up and doon lik a hoor's knickers, grave-nudger (=old person), close (=the common entrance and hall of a tenement building), close-mouth (=the street entrance of a close), back-close (=the rear area of a close), room and kitchen (=a

tenement flat)

6.1.10. 「犯罪・違反・ばくち・麻薬」関係語彙

blaw (=blow, marijuana), bump (=to fiddle, swindle), buzz, chib (=knife, blade, razor, etc.), chib-merchant, chib-mark (=scar), crash the lights, go doon (=to lose), ecky (=the drug ecstasy), eckied(=under the influence of drug), gommy money (=fake money), the heavy team (=a gang), huckle, jag up (=inject oneself with a narcotic), jag (=injection)

6.1.11. 「恋愛・性・女性」関係語彙

Black Street, get a click, cuff (=unattached woman), doll, old doll (=an elderly lady, mother), a bit of gear (=a sexually attractive woman), get one's grip (=have sexual intercourse), get a grip (=cuddle, embrace), give someone the heave (=dump a lover), hen, hing about wi someone (=to go out with someone, have someone as one's boy/girl friend), a hing-oot (=a woman of easy virtue), honey, no honey, huvtae/havtae case (=a wedding made necessary by a pregnancy)

6.1.12. 「学校・教育」関係語彙

boss (=headmaster), deepie/deepo, dingy/dinny (=the dining hall), dinner school/hall (=a school canteen where lunches are served), dog (< dodge : 'avoid'=to play truant), dogger, dogger's card, edgy (=a lookout), edgyman, keep edgy (=to keep a lookout), guidie (=a guidance teacher), heidie (=school master), Home Ekies (=Home Economics), inky (=felt-tip pen), plunk (=to dodge school), squaddie (=P.E. teacher), yop (=clype)

6.1.13. その他「日常生活（買い物・お金・食物・衣服・体調・遊びなど）」関係語彙

brick (=a pound sterling), broken pay, broo/buroo, bucket (=bin), bumfle (=wrinkled, creased), burny (=very hot), cady (=a man's hat), cally dosh (=money), cargo (=carry-out), carry-out/kerry-oot/cairry-oot (=take away), cattie (=catalogue), chap (=knock), chin (=to stop and

speak to a person), claim (=to greet someone in a friendly manner), Clamp it! (=Be quiet!), clappy-doo (<<Gaelic>clab =large black mussel), cloy up (<clay up = shut up), coal-carry (=piggy back), corrie-fistit (=left-handed), corrie-fister, to coup/cowp (=to spill), to coup out (=fall asleep), coupon (=face), crater-face, desperate (=be in dire need of a toilet), diddy (=a female breast or nipple), doosh (=face), the enemy (=the time), How's the enemy? (=What time is it?), five-spot (=a five-pound note), geggie (=mouth), girth (=fat belly), gub (=mouth), go halfers/haufers, Hameldaeme (<Home will do me.: 'mythical holiday destination'), het (= 'it' of tag), hoachin (=full of, very busy), hot-pea special, hump (=carry), hunner (=hundred), thoosans (=thousands), icy /icie (=ice-cream van), indescribables (=pakora), haud the jaikets, boke /boak (=vomit), Green Lady (=health visitor), hingy/hingin (=not feeling very well), honk (=to vomit), hughie/ huey/ hughie bush (=to vomit), away for ile (=worn out, exhausted), country pancake (=a cow's dropping), doo (=dove), doocot/dooket (=dovecote), hee-haw (=nothing at all.), here (=here is/are), Heard it!, How's it gaun? (=How's it going?), hullo!, intit no? (=isn't it not?), rats (=a child), sangwidge (=sandwich)

【注】

- 1) この時代の「スコット人」を示す名称 Scots と、今話題にしている「スコッツ語／スコットランド語」を意味する Scots とが同一名であるため紛らわしい。前者は、5世紀ごろ、アイルランドからスコットランド南西部に移住してきて、先住のピクト人を次第に吸収していった、スコットランド・ゲール語を話していた民族のことである。
- 2) General Register Office for Scotland (スコットランド総合戸籍登記所) による、1996年の調査を参照。
- 3) これに相当するスピーチ・スタイルの変種が、グラスゴウのライバルの都市であるエディンバラにもあり、「モーニングサイド (Morningside)」と呼ばれる。
- 4) 「弾音 (Flap)」ともいわれる。Flap は舌尖を歯茎付近に向けてはじく音をさす場合と、上歯に押さえられた下唇をはじくように開放する音をさす場合とがあるが、今問題となっている音は前者のそれである。具体的には、標準英語の音素 /r/ の発音のように、/a/音を出しながら、舌の先端を後部歯茎に向かって後方にそらすのではなく、逆に舌を前方にぱたりと倒して音を出す。日本語の音素 /r/は「ラ、リ、ル、レ、ロ」に関係し、

一種の「弾音の (flapped) / r /」といえる。舌尖を弾く回数は一回のみの場合と複数回の場合とがある。

- 5) 調音器官を閉じずに発音する音素/w/,/y/, /r/, /l/,などの子音のことで、調音器官が摩擦を生じない程度に接近することから「接近音」の名称がついた。
- 6) 「顫動音」ともいい、巻き舌で、またはフランス語に見られるように口蓋垂を震わせて発音する音を意味する。この場合は、巻き舌を震わせて発音する「顫動音」を指している。
- 7) この現象は、エディンバラでの労働者階級を対象にした調査でも見られ、Romaine (1973) は、労働者階級の男性たちによってリードされた下からの変化であり、女性たちによってリードされた威信形 / ɝ / への変化に競合するものであると分析している。
- 8) 昔、ダイアナ妃への独占インタビューがテレビで放映された際、ダイアナ妃自身の話す英語の発話の中にこの声門閉鎖音が頻繁に使われており、驚いたことがある。ロンドンでは、今や「テムズ川河口英語 (Estuary English)」がロンドン全域を巻き込んで、イングランド南東部へ急速に広がりつつあり、かつての「ロンドン下町訛り (Cockney)」の存在そのものが消えつつあるが、ロンドン一般大衆の日常語の典型的な音声的特徴のひとつであった声門閉鎖音が社会的変種の階層を越えて王室の英語にまで波及した好例だといえよう。
- 9) Stanley Baxter. 1992. *The Parlamo Glasgow Omnibus*. Paul Harris Pub. ; Stanley Baxter and Alex Mitchel. 1983. "Let's Parlamo Glasgow Again-Merrorapattur." Paul Harris Publ. ; "Paliamo Glasgow Beside Book of Glasgow Humour and Parlamo Glasgow Omnibus."などを参照。

【資料提供者一覧】

- Barry Selkirk (60歳代、男性、サラリーマン)
Billy William Pullen (50歳代、男性、左官・タイル職人)
Bobby Lokat McDougall (50歳代、男性、画家)
Bruce Wilcock (60歳代、男性、写真家、鍛冶屋、シェトランド諸島在住)
Chris Brown (50歳代、男性、音楽教師)
Clarke Shearer (40歳代、男性、庭師)
Colon (40歳代、男性、大工)
Craig Ross (20歳代、男性、パブのバーテンダー)
David Calder (50歳代、男性、大学教師)
David Hunter (50歳代、男性、大工)
Dawn Cody (30歳代、女性、パブのバーテンダー)
Donalda McComb (40歳代、女性、小学校校長)
Dunnery (60歳代、男性、水道工)
Ewen (Eoshain) Macleod (50歳代、男性、音声技師)

Graham Norman (40歳代、男性、建築家)
Ian Black (60歳代、男性、作家)
Ian G. Brand (70歳代、男性、バグパイパー)
Isobel Graham (40歳代、女性、主婦、シェトランド諸島出身)
Jacqueline Woad (30歳代、女性、大学教師)
James Dale (50歳代、男性、バイオリン奏者)
Jean McFarlane (40歳代、女性、無職)
Jeremy Smith (50歳代、男性、大学教授)
Jess Corrigan (50歳代、女性、ラジオ放送局のプロデューサー)
Jim Corrigan (60歳代、男性、建築設計士)
Jim Manson (40歳代、男性、B&B 経営、シェトランド諸島在住)
Jimmy Watrick (Jimi Watret) (50歳代、男性、ギター奏者、歌手)
John Cornelius (60歳代、男性、無職)
John Duffy (80歳代、男性、元船長、地元の名士)
John McFarlane (50歳代、男性、サラリーマン)
John Pettigrew (50歳代、男性、職業不明)
Kenny Wale (40歳代、男性、バイオリン奏者)
Lena Fabrizio (40歳代、女性、高校教師)
Liz Irwin (40歳代、女性、看護婦長)
Lynne Smith (40歳代、女性、B&B 経営、シェトランド諸島在住)
Mary Ann Carrabino (50歳代、女性、建築家)
Melanie Shields (40歳代、女性、看護婦長)
Michael (Micky) Deans (50歳代、男性、ジャズ、サックス奏者)
Owen Hagan (60歳代、男性、元中・校教師、青少年カウンセラー)
Paul Gavin (40歳代、男性、映画製作照明・カメラマン)
Phil (Philip) Petherbridge (50歳代、男性、家屋解体業、マンドリン奏者)
Roy Ginever (60歳代、男性、パブのバーテンダー)
Sean Catterson (60歳代、男性、無職、アイルランド出身)
Stephen Ritchie (60歳代、男性、漁業船長、アバディーン在住)
Tom Shields (50歳代、男性、新聞記者、スポーツ・ジャーナリスト)
Tony McGrachan (30歳代、男性、グラスゴー大学院生)

【参考文献】

- Black, Ian. 2003. *Weegies vs. Edinbuggers (Why Glasgow Smiles Better Than Edinburgh) and Edinbuggers vs Weegies (Why Edinburgh is Slightly Superior to Glasgow)*. Edinburgh : Black & White Publishing Ltd.
- Brown, Keith and Martin Millar. 1980. "Auxiliary verbs in Edinburgh speech". *Transactions of the Philological Society*. 1980, 81-133.
- Carmichael, A. 1990. *The Sunday Post. A Selection of the Best Carmichael Cartoons : Glasgow—City of Smiles!*. Glasgow : D. C. Thomson & Co. Ltd.

- Cruttenden, Alan. 1981. "Falls and rises : meanings and universals," *Journal of Linguistics*. 17 : 1, 77–92.
- Currie, Karen. 1979. "Intonation systems of Scottish English," (Edinburgh PhD thesis, unpublished.)
- Davies, Alan. ed. 1975. *Problems in Language and Learning*. London : Heinemann.
- Jeffrey, Robert. 2002. *Gangland Glasgow : True Crime from the Streets*. Edinburgh : Black & White Publishing Ltd.
- Macafee, Caroline. 1983. *Varieties of English Around the World : Glasgow*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Macaulay, R. K. S. 1977. *Language, Social Class, and Education : A Glasgow Study*. Edinburgh : University of Edinburgh Press.
- McClure, J. D. 1980. "Western Scottish intonation : a preliminary study" in Waugh and van Schooneveld. 1980, 201–17.
- Mitchel, Alex. 1990. *The Sunday Post Parlamo Glasgow! : Visitors' Guide To The Everyday Language Of The European City Of Culture*. Glasgow : D. C. Thomson & Co., LTD.
- Morrison, Allan. 1997. *'Haud Yer Wheesht!' : Your Scottish Granny's Favourite Sayings*. Glasgow : Neil Wilson Publishing Ltd.
- _____. 2001. *'Cummoangetaff!' : The Adventures of Big Aggie MacDonald, the Glasgow Tramcar Clippie*. Glasgow : Neil Wilson Publishing Ltd.
- _____. 2005. *'Away an' Ask Yer Mother!' : Your Scottish Father's Favourite Sayings*. Glasgow : Neil Wilson Publishing Ltd.
- Munro, Michael. 1985. *The Patter : A Guide to Current Glasgow Usage*. Glasgow : Glasgow District Libraries.
- _____. 1988. *The Patter : Another Blast*. Edinburgh : Canongate Publishing Limited.
- _____. 2001. *The Complete Patter*. Edinburgh : Birlinn Limited.
- Romaine, Susanne. 1978. "Postvocalic /r/ in Scottish English : sound change in progress?" In Trudgill (1978), 144–57.
- Ross, David. (ed.) 1999. *Awa' an' Bile yer Heid! : Scottish Curses and Insults*. Edinburgh : Birlinn Limited.
- Simpson, Scott. 2004. *Shut Yer Pus*. Edinburgh : Black & White Publishing Ltd.
- Speitel, H. H. 1975. "Dialect." In Alan Davies (1975), 34–59.
- Sugimoto, T. 2006. "Language in Scotland and Gaelic Education in Glasgow." *The Seijo Bungei (The Seijo University Arts and Literature Quarterly)* No. 196 September 2006.
- Trudgill, Peter. ed. 1978. *Sociolinguistic Patterns in British English*. London : Edward Arnold.
- Waugh, L. R. and C. H. van Schooneveld, eds. 1980. *The Melody of Language*.

Baltimore : University Park Press.
Wood, Nicola. 1989. *Scottish Place Names*. Edinburgh : W & R Chambers Ltd.